

租界生活とアイデンティティ

―池田みち子「上海」を読む―

はじめに

池田みち子が、自分にとって「青春だった」¹とする『三田文学』に小説を書き始めたのは、昭和十二年頃だった。翌年の十月からの三ヶ月間、池田は中国の上海、南京、漢口を初めて訪れ、上海に半月ほど逗留した。昭和十四年新年号の『三田文学』には「支那」の特輯があり、従軍した小島政二郎の「従軍日記」を始め、昭和十二年盧溝橋事件後の中国を見に来た神山潤「上海」上陸前後、小田嶽夫「馮白樺君」、現地滞在中の池田みち子の「漢口へ続く揚子江」、中村恵の「北京生活第一課」などが収録された。その後、池田は中国体験を綴る随筆も載せ、昭和十五年、『三田文学』春季創作特輯五月号に「上海」を発表し、それを皮切りに、昭和十九年まで上海を舞台にした小説や随筆

邵 金 琪

など十数編を『三田文学』に書いた。しかしながら、これらすべて単行本に収録されなかった。

本稿では、池田みち子の最初の上海ものである「上海」という短編を取り上げる。語り手である女画家の「私」は、絵を描くために単身で上海に渡り、そこで自分の従兄である小川安彦と結婚した。彼は中国人の母と日本人の父を持つ混血児で、中国語名を周元賢と言う。ある日、虹口に出かけた「私」は、長い戦場生活を終え、翌々日日本に戻る記者の水島勇三に出会い、二人で一日中遊んだ。「私」は上海での生活を水島に話し、最後に、自分の東京での貸アトリエの売却を水島に頼んだが、断られる。二人が別れた後、「私」はフランス租界にある安彦との家に戻り、安彦から中国人の会社に転職したいという話を聞き、安彦と喧嘩になるのだった。二日後、帰国する水島を見

送るために郵船に乗った「私」に、水島はアトリエの家財を代わりに処分する話をするが、「私」は「やっぱり自分で帰るわ」と言いながら、上海の街を見つめた。このように、「私」が最後に日本に戻るかどうかわからないまま、小説は終わる。

作品が発表された翌月の『三田文学』の「今月の小説」では、「いつもながら執拗な筆致に引きづられるが、それだけに透명한情感に乏しく、作品の内面が混濁してある印象を受ける。それをこの作者のユニックだと云へば云へるが、文学が作家にとつて裸体になる世界であるとともに、衣装をまとふことの世界でもある秘密を知らなければならぬであらう。」と評された。ここでは、作品世界の不透明感が池田作品の特徴だと認められている。

また、「上海」は、昭和十五年第十一回芥川賞の候補作に挙げられた。「選評」³では、小島政二郎は「私達の知らない上海の生活と、日本人と支那人の合の子の蒼白いような物憂い性格が、いかにもよく——手で触って見るように書けている。」と評価したが、作品の最後に「手薄さ」を感じるのが問題であるとした。川端康成は「類廢的であり、虚無的ではあるが、作者はそれを肯定せず、それを悲しんでいる。作者の態度に常識の安住が流行する時、池田氏の身をゆがめての悲しみは、本当

のことを書いている」と評した。

「上海」の先行研究において、大橋毅彦氏が「上海」「上海にて」「上海の片隅」に登場する女主人公の存在に注目し、「結論をほしがらない」心を持った女主人公の存在によって、「日本の国威を投影した明朗上海のイメージに人々の意識を繋ぎ止めておこうとする「ひとかどの結論」は、それを取り繕う術を失っていくのである。」⁴と述べたように、日中戦争勃発後、日本の勢力が上海に高まっていく中、その体制を強化するために、「上海の明朗化」という標語が叫ばれたが、人々の意識はすれ違い、すべてが不透明になり、実際にはその標語から遠ざかるばかりだった。

池田みち子の「上海」には、上海における具体的な生活、上海にいる間の「私」の女性としての認識の変化、日中混血児小川安彦のアイデンティティの変化など、未だ論じきれていない点が少なくない。本稿では、当時の日本と上海の女性に関する認識と上海の日本人社会の状況を踏まえながら、作中人物がモダン上海にどのように自分の身を浮遊させ、アイデンティティを変化させたかに注目し、作品を考察していこうと思う。

一、「上海」における租界生活

昭和十二年七月七日、北京郊外で盧溝橋事件が発生した。八月十三日、上海に飛び火し、第二次上海事変が起こり、日中全面戦争に発展した。十一月二日、華界が日本軍の占領下に置かれ、上海租界も完全に包囲されることで事変は終結した。日本軍に包囲された上海租界の地理的領域は著しく狭くなった。共同租界の二・五平方キロメートルのうち、虹口、楊樹浦地域一・九平方キロメートルは日本軍の占領下に置かれ、共同租界及びフランス租界は事変以前の半分以下になった。日本軍は民衆の中国への関心を喚起するために、ペン部隊を派遣し、日本語メディアで中国関連の記事や文芸作品が多く発表された。『三田文学』でも新人作家が戦場に取材に行き、紀行文、随筆、日記など様々なジャンルの作品を掲載した。そのなか、『三田文学』にデビューしてからまだ二年目の池田みち子は、昭和十四年十月二日に上海につき、上海・南京・漢口と、往復し、三ヶ月間中国を旅行した。その間に半月ぐらい上海に滞在した。⁵⁾当時住んでいた場所はフランス租界にあり、「上海」における「私」と安彦の住所と同じ地区である。

フランス租界に入ると、プラタナスやアカシアの街路樹が続

くアスファルトの道に、洋館の住宅、アール・デコの装飾が美しいホテル、西洋風の公園などが散在し、人々を一瞬パリの一角に迷い込んだような気分させたという。また、パール、賭博場、ハイ・アライ競技場などの歓楽場はフランス租界に集まっていた。日本人居留民にとって、蘇州河の向こうの見慣れぬ場所であった。ここで暮らした日本人は、社会的地位がある者や文化人など、いわゆるエリートが多く、一般の日本人はあまりここへ足を運ばなかった。吉行エイスケはフランス租界について、『新しい上海のプライヴェート』（先進社、昭和七年）で次のように描いている。

フランス租界の公認賭博場では、一八一号がもつとも大きく、租界工部局にとつての財源の尤なるものだ。これは当地の反動団体、青帯の組織下にあつてここに入場するものは一定の所持金を持つてゐないと不可能だ。場内はシイコ賭博を中心にして種々の賭博が開催されてゐる。フランス・タウンを人々は悪の華の咲く街だと云つてゐる。阿片密輸入。秘密結社。びろうな路地には赤色の支部があつたり、突然、ギャング団が横行して人質を取つたりする。つまり、フランス・タウンは自由な街なのだ。

日本人にとつての魔都上海のイメージの多くは、フランス租界から立ち上がっている。西欧的な文化が定着し、享樂的な施設も多いといった話から、自由な街である故に、中国共産党の革命運動、独立運動の動きがあり、強盜などの犯罪も多いという空想が膨らんだものだろう。しかし、多くの日本人は実際に行つたことがないため、妄想から恐怖感も深まつたと考えられる。

本作において、夜遅く、フランス租界の家に帰ろうとする「私」は、フランス租界の赤いバスに間に合わず、自動車屋の場所を巡警に尋ねようとした。しかし、巡警が中国人であつたため、「抗日テロや強盜が充満してゐると教へ込まれた街」で、どうすれば家に帰れるかと心配になつた「私」は、言葉のまるで通じない巡警の顔を仰ぎながら、思わず日本語で「ああ困つた」と呟いた。一般的に、初めて上海に来る日本人は日本軍の占領下の虹口地区に住むことが多く、同じことが虹口地区で起これば、必ず日本人の巡警によつて、スムーズに解決できるはずであつたが、「私」は小川安彦と同居してから、ずっとフランス租界で住み続けていた。また、「私」と安彦の住所の一階にはロシア人が住んでいるように、事変後、フランス租界に避難してき

た中国人とロシア人がここに居住し、さらに異民族の多彩な文化が持ち込まれていた。

第二次上海事変後、日本側は上海租界の存在を強く批判した。とりわけ、英国人が主導する共同租界の行政制度の不合理性を訴え、元上海日本人居留団団長の安井源吾は『揚子江』に「上海租界の解剖」という一文を発表した。彼はそこで、「長年にわたる上海租界統治に心酔し、租界当局の施政運用は、大いに弛緩して悪弊山積し、怨嗟の声が大に高まつてきた今日、日本人と云はず、諸外国人間に於て、租界行政大改革を絶叫するのは、けだし当然の事だと思ふ。近年一層国際化し来れる上海租界行政に於て、英国人が果たして国際正義の觀念を尊重してゐるか否か、専制横暴越軌の行為なきや否や、数十年一日の如く持ち越された土地章程が、果たして租界の現状に則し、公正なりや否や。」と主張し、「市参事会選挙制度の不合理」などの七つの行政問題も取り上げた。その背後にある日本軍も、日本人が共同租界の管理に参入することを支持する。当時の中支派遣軍報道部長陸軍中佐であつた馬淵逸雄は、「上海租界に就いて」で次のように述べている。

これは上海戦当時、我軍が租界内に於ける、第三国の權益

を尊重擁護するの武士道見地から、此地区内に兵力を死闘することを避けた為めで、幸にも租界のみが戦禍から免れ、此地に住する四百万の中国人中には、治外法権を有する外人の陰にかくれて暗躍する抗日分子に引き摺られて、「孤島上海」と称し、重慶政府の指令に動いて、抗日の策源地たるかの觀を呈して居るのである。(中略) 現在租界内の不逞分子取締等に関して租界当局に委して居ることは、戦時日本軍が治安維持の必要上から生じた結果に過ぎない。適當なる時期が来れば新政権が担任すべき問題である。現在中は支一帯我軍によつて、占領せられ、治安維持の主体が日本に存する限り、租界が日本軍の治安維持に全面的に協力するのは固より当然のことであらねばならない。

事変後、共同租界に住んでいる外国人の中で、日本人の数は最多になった。日本人の利益を守るために、日本軍は共同租界の管理部門である工部局に改革を要求した。その結果、工部局は蘇州河北の虹口地区、楊樹浦地区の警察権を放棄した。そして、共同租界には二百人以上の日本人警察が派遣された。しかし、フランス租界の管理はまだフランス駐上海領事及び租界行政管理機構である公董局に属し、フランス租界には事変以前

のような日本人の姿はあまり見られず、安楽な生活を送る自由な「孤島」であった。上海を占領した日本の優勢は、ここではまったく發揮できていない。日本語メディアで上海の良さが報じられている一方、昭和十四年の上海のガイドブックでは、フランス租界について、「警察取締寛大なるため、諸種の遊場多く又常に政治犯人其他不良の徒の潜伏に自由ならしめ、市井の無頼漢等は多く佛租界に其の巢窟を置き、上海に於る排日抗日も茲に根拠地を置いて居る」など、租界の危険性をアピールしたため、日本人のフランス租界に対する印象は変化しなかった。

ところで、フランス租界以外に、日本人街と呼ばれた虹口地区にあるダンスホールや共同租界にある料理屋も小説の舞台となつている。当時上海にはダンスホールがたくさんあり、中国人と日本人が経営するダンスホール以外のホールでは、シロ(静安寺路)、パラマウント(極司非而路愚園路角)は最も高級なホールで、それらホールの大部分ではタキシードが着用された。その他にデルモント(アベニュー・ヘイグ)、セント・ジョージ(佛租界杜馬路)、ブラツクキャット(静安寺路競馬場附近)、カサノヴァ(愛多亜路大世界付近)があった。また、日本人経営のものにはブリユー・バード(北四川路)、桃山(北四川路)、タイガー(北四川路)、ライオン(乍浦路)があった。さらに、

中国人経営のホールは、大華（アムバサダー）（愛多亜路）、東亞（南京路）、大東（永安公司ビル）、新新（新新公司ビル）、巴黎（西藏路）、安樂宮、嫦娥（佛租借天主堂街）、大滬（靜安寺路）、大陸（寧波路）である。⁹⁾

小説「上海」の冒頭は、「私」と従軍記者の水島勇三の日本人街にあるダンスホールでの会話から始まる。語り手の「私」は、ダンスホールについて、「広い空家の壁を造花で飾つて、楽士と女の数を急いで揃へた様な、暖房の不完全なこのホールも、上海の日本人領域では、一流のなかに数へられてゐるのだけけれど、良い加減の足どりで、唯ぐるぐると歩き廻つてゐる男達を見ると、故国を遠く離れて出稼ぎにきた日本人の女と、慰安のない毎日にむせてゐる日本人の男達とが、時間を急いで慰めあつてゐる荒つぽさがあつた」というように記している。客の中には軍服を着る人が多く、まだダンスに慣れなかつた人もいた。池田が上海を訪れた時期はすでに日中全面戦争に入り、ダンスホールの経営は悪くなつていたはずである。神田肅の『大陸進出読本』は、虹口地区のダンスホールの状況について、次のように述べている。

邦人ホールは上海に現在四軒、内容は判然しないが見た

目は相当の繁栄振りを思はせるものがある。切符は一枚二十五銭、ダンサーに美人は少ない。天津のダンスホールが閉鎖を名ぜられたので、こちらへも飛火するのでないかと、経営者は内心ビクビクものだが、国際都市上海だとの強味もあるので、この点に自慰を求めてゐる始末である。¹⁰⁾

国際都市であるからこそ、戦争が進行中にもかかわらず、娯楽も続けられるという認識があつた。このような状況は日本人経営のホールだけでなく、共同租界にある中国人経営のホールも同じであつた。第二次事変を経験後、戦火で大きな損失を受けた日本人居留民や戦場から帰つてきた日本人は、精神的な苦痛から解き放たれ、ようやく安定した生活を手に入れた。しかし、上海以外の中国各地における日本軍の統制はまだ不安定であり、いつ戦争に戻るかもわからない状況下で、客たちが「食傷するまで」踊る理由は、もし再び戦場に赴くと二度とダンスホールでの遊びができなくなるかもしれないという不安からだったのではないだろうか。

二、「新しい女」から「私」の自己再認識へ

先行研究で論じられてきたように、「上海」の作品世界は不透明で、人物の透明な情感も乏しい。その原因の一つは女主人公、語り手の「私」の存在である。「私」は日本から上海に渡り、生活スタイルが一変するのであり、水島勇三と小川安彦という二人の男に対する態度から、「私」は自分自身の考えを変え、上海という異郷で、女性としての生き方についても再認識したと考えられる。

元々、本を買いに虹口まで出かけた「私」は、戦場から帰ってきた従軍記者の水島勇三と偶然再会し、二人は一日一緒に過ごしたが、「私」は水島に対して良い印象を持たなかった。その場面に、次のような記述がある。

今日は、いろいろ彼に御馳走になつたけれど、その御馳走の仕方だつて、まるで私の気持ちをはからふとはしないで、料理屋や賭博場やダンスホールを、自分勝手に引き釣り廻してゐるのに過ぎない。かういふ男の無遠慮さには、私は慣らされてゐるやうであつた。今日は色々それまでは我が儘で気の強い女だと自分のことを決めていたのに、実際は

受身にしか生活できないやうに習慣づけられてしまつてゐただと解るやうになつたのだつた。

大正時代に入ると、「女性の状況についていえば、女子中等教育がかなり普及するとともに、日露戦争後の日本資本主義の発展を背景に女性の職域が大きく拡大した時期である。個人主義の価値観が広まり、個人の権利が訴えられ、女性は男性と平等な市民であると主張している。何の批判もなく『家』や男性のための自己犠牲を拒否するようになった。女性の役割を家庭内に限定することなく、女性の社会進出を良しとする傾向が強いことである。」¹⁾というように、日常生活において互いに尊重・敬愛しあう夫婦を理想とし、夫と対等な女性が求められている。「我が儘で気の強い女だと自分のことを決めていた」という「私」は「新しい女」の思想の影響で、自由に生きるために画家になつたと考えられる。日本にいた「私」は「新しい女」のつもりで生きようとし、数少ない女流画家になり、借りアトリエを持ちながら、独立生活してきた。そして、自分の意志で絵を描くために上海に行くという決意もした。しかし、女性の社会経済に關する権利は増えても、学校で受けている教育において求められている女性像は「良妻賢母」であり、父あるいは夫の話に従

うのが一般的である。上海に来る前の「私」は、自分が周りに振り回されないように生きてきたと考えたが、実際に上海を訪れ、本当の自由を手に入れたのちに再び水島のような典型的な日本人に出会うと、今まで日本でどんな生活したかに気づかされ、日本での生活は本当の自由ではなかったことがわかる。

また、「私」は水島と話すうちに、上海に残る決心を徐々に固めた。最初、上海に来た時は、すぐに日本に帰るつもりだったが、五ヶ月が過ぎてしまった。東京のアトリエが重い足枷のように「私」にぶらさがり、これからの上海での生活を考えるのと、アトリエは邪魔な存在となる。水島のような日本人は必ず帰国するが、上海に来た「私」にとって、上海で画家として新しい人生が始まることは、これからも長く上海に住み続けようとする「私」の考えの決め手になった。

一方、「私」の考え方を大きく変えたのは、夫の小川安彦である。彼との生活については、以下のように記されている。

私はアトリエのなかで過す毎日に、自分の生涯の果てまでも、だいたいどんなものか解つてしまふ様な落日の気持ちを感じる様になつてゐた。かうして現実だけを種にしてゐると、基盤の目を一つづつ消して行く様な毎日に、ふと底

知れぬ淋しさを覚えた。こんな生活からやつとひとつの隙間を見つけて、私は安彦に救ひ出されたばかりなのだ。まるで日本人のゐないフランス租界の片隅で、ぼつんと安彦と二人ぎり、愛欲の毎日に浸かつてゐると、酔ひの冷めるのを恐れてなほ更酔はふとする人の様に、いつまでも迷つてゐたいと願はずにはゐられなかつた。

日本での生活において「生涯の果て」が大体分かるような気持ちになつた「私」は、上海の全てが新鮮だと感じ、結婚までした。本来であれば、結婚は戸主の許しがないとできないことだが、「私」は東京にいる家族を顧みず、安彦との結婚は誰からも祝福されなかつた。夫が家父長権を握っている一般の日本人家族と違い、安彦は自分を中心になつて妻に指図したり、命令したりしない性格で、彼との生活によつて、「私」の主体性は次第に揺いでいく。

彼は毎朝の出勤にも朝寝坊の私が眼を覚めない様に気がつけて、そつと寢床を抜け出して行くのであつた。私は随分我儘してゐるやうだけど、真当は少しも我儘なのではないと思つた。何を相談しても、「貴女の自由になさい。それ

に僕、従ひますから。」という安彦に、私は氣随氣儘に振る舞つてゐるやうに見せかけながら、眞当は、らちを超えないやうに氣を配りながら、自由さうに振舞つてゐるのに過ぎない様であつた。

安彦はいつも「自由になさい」と言っているが、「私」は次第に安彦の気持ちを考えながら行動することになった。安彦が望む「我儘な女」になるために、努力している自分の醜さに気づき、縛られている感じがし、「私」にとつて「自由になさい」という言葉が一種の重みになるのである。

さらに、安彦が中国人の会社で働きたいと提案したことにより「私」と安彦の關係にひびが入る。「私」は「このチャンコロ奴！」とつい腹の中では叫んでしまふが、その時、安彦はまた「今の会社に勤めてゐてもよいのよ、貴女の好むままにした」と思ふ」と言い出すのであり、自分の考えがあるにもかかわらず、「私」の意見を尊重するような素振りを示す。「貴女の好むまま」、「自由にしなさい」などの言葉は、「私」にとつて一種の呪縛のようなもので、「私」は直接には反対しないが、「私」の「尖つた声」や「虹口へ引越し」の提案などに安彦への非難がうかがえる。

「私」は、絵を描くことによる女性の社会価値を実現する目的で上海に來た。日本にいた頃の「私」はずっと「受け身」になつていたことが、水島の態度からわかつた。また、フランス租界に住んでいる「私」が日本人コミュニティに引越すことや日本に戻るなどを考えたのも、自由を求める「私」の婦属意識の表れではないだろうか。戸主の許しが無いまま、安彦と結婚までしたことからわかるように、家父長制の家族關係の中から抜け出そうとしている「私」は男性に頼らず、自分の運命は自分で決めるという自由を味わい、上海に住み続けることを決めた。しかし、安彦との生活も本当の自由ではなく、ただ安彦が求める女性としての暮らし方のなかで振る舞う「自由」であつた。そして、上海の生活を通して、「私」には男の考え方に従うという縛りに抵抗する意識が芽生えるのである。

三、上海に浮遊するアイデンティティ

近代上海において、世界各国からまた中国各地からやってきた人々は、上海に身を任せながら自らのアイデンティティを浮遊させ、時にそれぞれのアイデンティティをぶつけ合い、時に隠そうとしている。その複雑なアイデンティティこそ、上海の

魅力になる。

小説の登場人物の中で、設定が最も複雑な人物は、父が日本人で母が中国人の小川安彦（中国名・周元賢）である。彼は上海生まれで、子供の時、母から中国人として育てられた。その後、日本語のまるでわからないまま父親の元へ送られ、継母に育てられた。「一年間家庭にゐて日本語を習った。それから、八歳の児童のなかにひとりぎりまじつて小学校へ行きなほした。かうして二十歳で小学校を卒へ、中学三年まで行くと父親が死んだ。すると彼はそれを待てゐたかの様に、その頃はまだ生きてゐた母親のところへ帰つた。それぎり学校は止めてしまひ、支那人の本屋の店員になつた。それ以来の十年の間、通訳になるまで、支那人ばかりの間で生活してきた。そして、一度も日本へは帰つて来なかつた。」とある。そして、妻の「私」に対する態度からわかるように、人に指図したり、命令したり、自分を中心になつて妻を動かすことがまるでできない性格の持ち主である。彼のアイデンティティには常に対立がある。日本人である父からもらった日本人の血と、母からもらった中国人の血との対立である。それゆえに、彼は時に日本人の立場に立てば支配者になり、時に中国人の立場に立てば抵抗者になる。

安彦は日本人の民族性と中国人の民族性を継いで、国籍は日

本であるが、中国に住んでいた時間の方が遙かに長い。小さい頃、母の元で、父不在の家庭で育てられ、日本に行つても、父の実家で成長したが、継母に優遇されなかつた。若い時の様々な経験は安彦の性格に影響を及ぼしたと思われる。

「私」は深夜にフランス租界の家に無事に帰り、安彦と以下のような会話を展開する。

「随分道が恐ろしかつたのよ、それでもちゃんと帰つてきたのに、もうこれから、遅くなつたら泊つて来るわよ」
彼は上衣のボタンを指先で神経質に引つぱりながら顔をそむけて、

「僕ね、貴女が迎ひに来いつて電話するかも知れないと思つて、洋服に着かへてた。でも、僕のためにわざわざ帰つて来るなんて、僕、そんな風には貴女を束縛したくはないの、貴女の自由にしてゐて欲しいの、僕がどんなに心配しても、そんなことちつともかまはない。でも、貴女が帰つて来たの、僕大変に喜んでるの、」
（中略）他人の奥さんにさへ、「危険だから泊つて行け、」と、はつきり云ふ人もあるのにと思へた。

安彦は優しく、気配りのできる良い人であるが、彼は優柔不断で、一番伝えたいことが言えないため、遠回りすぎて言葉に含まれている愛情を「私」は受け取れない。この場面でも、「私」が望む答えはただ「危険だから泊つて行け」という一言であるが、安彦の「僕がどんなに心配しても、そんなことちつともかまはない」という言葉では「私」は満足することができない。

また、安彦は自分を中心になつて物事を決めるわけではなく、家庭の中の一番重要な主導権を「私」に譲る。それは彼にとつて婉曲な愛の告白である。その代わり、決定権を委ねられた「私」には、選択のプレッシャーがあり、「真当は、らちを超えないやうに気を配りながら、自由さうに振舞つてゐるのに過ぎない様で」、縛られる感じがする。特に、仕事に関する重大な問題を避け、責任回避するようやり方で、安彦の性格の弱さが露呈している。

実際の当時の中国人男性は、安彦のように女性に従い、結婚後にも、家の決定権を妻に預ける男性はほほいかなかった。杉山平助『支那と支那人と日本』（改造社、昭和十三年）には、「支那の男は、女に対してやさしくて親切だ。ネンバリと氣質にネバリがあつて、辛棒強い。（中略）恋愛の期間には、男が仕切りに女の機嫌をとり、後を追ひまはしながら、ひとたび結婚し

て妻とすると、たちまち縛りつけた捕虜でも見るやうに、その態度の変化させて行くことは、どこの国の男子の通有性でもある。日本人にもそれがないとは云はないが、支那人の場合にはその変化があまりに現金で、酷烈で、精神的な残忍性にみちてゐるのだ。」と記されている。安彦は恋愛の際、一般の中国人男性と同様に、女性に優しくし、女性を尊重する。しかし、結婚後は、一般の中国人男性とは違い、相変わらず女性の機嫌をとり、「私」の考えに従っている。彼は中国人の性格を持つが、典型的な中国人男性のイメージとは異なっている。

「私」と安彦の間には、いくつかの不和があつたが、それらは「私」にとつて安彦と上海に住み続けるといふ決心を揺さぶることはなかった。安彦は二ヶ国の言葉が話せるため、今では日本の国策会社で通訳をしている。彼は日本人だといふので、中国人の通訳と比べて給料も良かった。国策会社について、馬郡健次郎は次のように述べている。

日支戦争の勝利的進行と歩調を合わせて北支経済の開発は早くより問題となつてゐたが、中支の軍事行動の結果、中支の振興をも合わせて問題とするに至り、対支那問題に於ける二つの開発会社即ち北支開発会社、中支開発会社の二

つが生まれるに至つた。⁽¹²⁾

上海に設立された中支開発会社は、日本政府の戦時中の中国での経済経営において重要な地位を占めている。会社の営業内容も、日本軍や日本政府の政治と軍事政策に強く関わる。安彦の周りの同僚は純粋な日本人であるが、そこで働いている安彦は上海の日本人社会ではどのように位置付けられるだろうか。上海日本人居留民団社会について、高網博文氏は次のように示している。

一九三〇年前後の日本人社会は、商社・銀行支店長や高級官吏、会社経営者などエリート層が約3%、紡績会社や銀行、商社に勤める給与生活者を中心とした中間層が約40%を占め、残りを中小商人層、中小工業の親方・職工層、飲食・サービス業者、各種雑業層、無職の下層民衆からなる民衆層が構成した。当時、日本人居留民のこうした階層性は、それぞれ「会社派」と「土着派」と称される差別化によって、より明示的にあらわれていた。その名が示すように、「会社派」はエリート層や在華紡の社員たちが属し、「土着派」は土着的商工業者や民衆層が構成した。⁽¹³⁾

安彦は国策会社勤めで、「会社派」に属し、上海日本人居留民社会の中間層以上に入っている。生活では一番高い料金の映画の席を取り、外出するならすぐ自動車に乗るなど、贅沢な生活をしている。しかし、安彦が仕事を变えたいという話を切り出した後、二人の雰囲気は一変する。

「どんなどころへ変わりたいのよ、もう決つてるの、」

「まだなの、僕、中国人のところで働きたいの、」(中略)

「さう、平和派の、精精衛⁽¹⁴⁾とかそんな人達のところ、」

「さうぢやない、ただの商人なの、」(中略)

「ねえ、どうして支那人のところがいいの、だつて、貴方は日本人ぢやないの、」

「僕!」

彼は口辺に奇妙な微笑を漂はした。そして、

「僕の母は中国人だつた、」(中略)

「そりや、実際には両方の血が通つてゐるのだらうけど、国籍はちゃんと日本にあるんぢやないの、」彼は私の言葉を肯定するかの様に微笑んだ。(中略)

彼はやつぱり微笑んだまま、「そりや僕、小川安彦には違

ひないけど、又、周元賢でもあるわけです。」

安彦が転職しようとしているのは「ただ普通」の中国人の会社、つまり日本あるいは日本人との関わりの少ない職場である。今の会社と大きく違い、背後に日本政府の支持があるわけではなく、日本政府や日本軍の政策に協力することもなく、ほぼ日本軍の影響の及ばないところである。元々国策会社に勤めていたときの安彦は、中国人の通訳と違い、純粋な日本人と同じ待遇であった。しかし、混血児で、自分の体にも中国人の血が流れている彼にとつて、戦時中の国策会社で働き、日本軍の中国占領に協力する仕事を携わるのは、苦痛だったであろう。彼のアイデンティティの揺らぎは、次のような箇所にも示されている。

私は、安彦にもこんな兵隊になる資格はあるのだと思ひ、支那軍に向かつて突進する彼の姿を描いてみた。そんな時になれば、彼の身体の中に眠つてゐる日本人の血が一度に燃えて、彼は誰より先に塹壕の中に飛び込んで行くかも知れない。咄嗟には日本語が云へなくて、「没法子！」¹⁵とかなんとかつい支那語で叫んで突込むだらう。私には彼が給

料が安くなる支那人のところへ働きたいと云ふのも、結局は父親から受けついだ日本人の清癖のやうに思へた。

「私」の想像するように、いつか安彦には日中対立に直面する日が来る。日本の兵隊になり、中国軍に突進するのはその極限の状態であるが、彼はその状態を回避するために、国策会社の仕事を辞めたいというわけである。「日本人の清癖のやう」に、自分の二つの血統を守るために、支那人が多く住んでいる華界でも、日本人街でもなく、フランス租界に住むようになり、さらに、日本軍に貢献する国策会社ではなく一般の中国人の会社で働きたいと思つている。彼は中国と日本のどちらか一方にの帰属するのではなく、フランス租界の特性のような「国の中の国」で、中国と日本の間に生きようとするのである。

しかし、彼は中国人の会社で働くこととしているが、中国人に近寄りすぎないように、まだフランス租界で住み続けようとする彼のアイデンティティには元々日本人であるという意識があったが、次第に中国人の血が蘇った。だが、彼は自分が完全に中国人であることも拒み、無意識に自分のアイデンティティを曖昧にしていると云える。

魔都上海には、安彦のような混血児以外にも、池田みち子

の「上海にて」に描かれたレオポルトのように自ら自分の国籍を放棄する人もいる。自分の国から守られなかった人々は、自己のアイデンティティを隠そうとする。それと対照的に、日本の国威が徐々に高まって行くなか、上海に住んでいる日本人たちは、自分のアイデンティティを強調し、更なる権利を求めるようになった。いかなるアイデンティティを持つ人間でも上海は全部を包み込み、人々が自由に生きることができる国際都市だったのである。

終わりに

本稿では、従来の研究が主に作品世界の不透明さを指摘してきた池田みち子の「上海」を、上海における租界生活の具体的な描写、登場人物の心理などの分析により、上海に住む日本人女性の自己認識と、混血児のアイデンティティの変化を中心として考察してきた。

小説では、最初に虹口という日本人街を描き、特にダンスホールという特徴的な場所から物語が始まり、日本人街から南へ、共同租界の南京路の料亭を経て、最後に、「私」は安彦と生活するフランス租界に戻る。それらの場所についての特別な描写

はなく、具体的な名前も描かれていないが、それぞれの場所における登場人物の会話の中で、第二次上海事変後の上海にいる日本人の生活や上海社会の状況を垣間見ることができている。

「私」という女性は、典型的な日本人女性ではなく、上海にいたる間に、性格や自己への認識が変わっていく。二人の男との付き合いで、それぞれに対する態度から自己を再認識していくのであり、上海の体験は彼女にとって、自分が何を求めているのか、どのように生きていくのかを見つめ直す契機となった。

一方、日中混血児であった安彦は、国籍は日本であるが、純粹な日本人にコンプレックスを持つようになり、その状況から逃げ出すために日本とあまり関わりのない中国人の会社で勤めようとする。つまり、彼は日本人社会にも、中国人社会にも帰属することなく、アイデンティティを浮遊させていくのである。そのような彼の生き方は上海という特殊な国際社会だからこそ可能となるのである。

池田みち子は、昭和十三年の上海体験に基づき、アイデンティティの変化を軸として、「上海」を創作した。他の〈上海もの〉でも、無国籍外国人や、外国育ちの日本人などの曖昧なアイデンティティを持つ人々を登場させ、魔都上海を描こうとしている。池田の〈上海もの〉を論じる際、登場人物のアイデンティ

ティを常に意識すべきだと考えられる。

また、「上海」の舞台は主にフランス租界であり、上海日本人居留民同士の関係、上海日本社会の状況などにはあまり触れていない。安彦が勤めていた国策会社が登場したが、上海の邦人会社を詳しく書いていない。しかし、昭和十五年に池田は二度目上海に渡り、短期滞在予定が長期滞在になり、お金が目になくなって日本の会社で勤め始める。その会社勤めの経験に基づいて、池田は「上海二世」「国際都市」などの日本人居留民社会、特に邦人会社の状況について詳しく描いた小説を発表し、作品の舞台もフランス租界から、日本人街に移り、中国人も作品に登場するようになる。今後、池田の二度目の上海体験に基づいた小説を取り上げ、登場人物のアイデンティティを意識しながら、会社勤めの日本人たちの関係や周りにいる外国人の関係を考察し、邦人商社と上海日本人居留民社会の関連を捉えつつ、池田の〈上海もの〉における国際都市上海の全体のイメージをさらに検討していきたい。

〔注〕

(1) 池田みち子「三田文学は私の青春だった」(『三田文学』昭和五十一年十月)

(2) 「今月の小説 三田文学」(『三田文学』昭和十五年六月)

(3) 「第十一回芥川賞選評 昭和十五年上半期」(『文藝春秋』昭和十五年九月)

(4) 大橋毅彦「明朗上海に刺さった小さな刺——池田みち子の〈上海もの〉をめぐる」(『アジア遊学』一六七号、平成二十五年八月)

(5) 池田みち子「漢口へ続く揚子江」(『三田文学』昭和十四年一月)

(6) 安井源吾「上海租界の解剖」(『揚子江』昭和十三年二月)

(7) 馬淵逸雄「上海租界に就いて」(『揚子江』昭和十四年七月)

(8) ジャパン・ツーリスト・ビューロー編『上海』(ジャパン・ツーリスト・ビューロー(日本国際観光局)、昭和十四年六月)

(9) 同前

(10) 神田肅『大陸進出読本』(新々社、昭和十四年八月)

(11) 菅澤康雄「戦前の婦人雑誌にみる「公民的女性像」——大正デモクラシー期を中心にして」(『民主主義教育』平成十九年五月)

(12) 馬郡健次郎『大陸経営』(巖松堂書店、昭和十三年六月)

(13) 高綱博文『国際都市』上海のなかの日本人』(研文出版、平成二十一年)

(14) 昭和十二年七月七日の盧溝橋事件をきっかけに、日中戦争（支那事変）が始まった。徹底抗戦を貫く蔣介石に対し、汪精衛は「抗戦」による民衆の被害と中国の国力の低迷に心を痛め、「反共親日」の立場を示し、和平グループの中心的存在となった。

(15) 日本語では、「仕方ない」の意。

〔付記〕

「上海」の本文の引用は『三田文学』（昭和十五年五月）に拠る。

（しょう きんき／本学大学院生）